dec monthly vol.433
2021年10月1日発行　発行人 編集人 山口 登美男
発行所 一般社団法人 北海道開発技術センター
TEL(011)738-3363 FAX(011)738-1889 URL http://www.decnet.or.jp/ E-mail dec_info01@decnet.or.jp
〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

notice

第3回ほっかいどう学シンポジウム

通常開催

■日　時:11月13日（土）13：00受付開始　13：30～15：30
■会　場:札幌ビューホテル大通公園 地下2階 ピアリッジホール
■定　員:150名※定員になり次第締切ます。　■会費:無料

お問合せ
（一社）北海道開発技術センター内（札幌市北区北11条西2丁目2番17号セントラル札幌北ビル）
特定非営利活動法人ほっかいどう学推進フォーラム事務局
TEL:011-738-3363　FAX:011-738-1889　E-mail:info@hokkaidogaku.org

新型コロナウイルス感染拡大状況によっては、開催方法が変更となる場合があります。
開催方法等につきましては、**ホームページ**（https://hokkaidogaku.org/）にてご確認ください。

お申込み
所属、氏名、連絡先（電話番号・E-mail）を明記し、
お申込みフォームまたは**Fax**のどちらかでお申込みください。

★お申込みフォーム▶
（https://hokkaidogaku.org/subscription/）

★FAX▶011-738-1889

申込:11月9日（火）まで

notice

第37回寒地技術シンポジウムのお知らせ

第37回寒地技術シンポジウムを札幌市（会場：札幌市教育文化会館）で開催いたします。寒地技術に関心を持つ多くの皆さまのお申込み、ご参加をお待ちしております。（新型コロナ感染症拡大状況により、開催方法を変更する場合はホームページ等でご案内いたします）
詳しくは下記ホームページをご覧ください。
http://www.decnet.or.jp/project/ctc/

「寒地技術シンポジウム」ウェブサイト

■開催日:2021年11月17日（水）～19日（金）
■会　場:札幌市教育文化会館（札幌市中央区北1条西13丁目）
■内　容:
★聴講（無料）……【受付締切】10月22日（金）
★論文発表（査読論文・報告論文）……受付は終了しました
★技術展示（本年はオンライン展示会となります）……受付は終了しました
★講演論文集CD-ROM・概要集冊子（有料）……【受付締切】10月22日（金）

編集後記　9月号の編集後記にてお知らせしておりましたシーニックバイウェイ「秀逸な道はじめました」展。緊急事態宣言の延長を受け、残念ながら開催中止となってしまいました。。。「秀逸な道」が今年本格実施となって初めての展示ということもあり、張りきって準備に全集中していた矢先の出来事だったので一瞬「ポカン」としてしまいました。。。でも、次回開催に向けて検討を進めていますので、いつの日かリベンジ開催できることを祈っています。また、シーニックバイウェイ支援センターでは、10月1日からデジタルスタンプラリー「よりみちHOKAIDO」で「シーニックデッキカフェスタンプラリー」を開催！詳細は、11月号でご紹介します！（R.W）

News letter since 1985 01 OCT
Hokkaido Development Engineering Center
dec monthly
2021.10.1 vol.433　デックマンスリー

● Monthly Topic（マンスリートピック）
「日本風景街道と国立公園の連携」
～NPO法人日本風景街道コミュニティ勉強会報告～
● dec Report（デックリポート）
〈寄稿01〉E-bike MTBを用いたロングライドアクティビティ開発事業
〈寄稿02〉国立公園を活用したアドベンチャートラベル事業

dec Interview >>> 一般社団法人国立公園支笏湖運営協議会会長、丸駒温泉旅館四代目館主　佐々木　義朗 氏

シーニックバイウェイと出会ったのは支笏湖観光が過渡期を迎えた2000年代初め。やがて「環境保全重視」の地域づくりを打ち出し、今、その実現の手応えを感じています。

2003年、北海道では全国に先駆けてシーニックバイウェイ制度の検討が始まりました。05年の制度開始間もなく正式指定ルートに登録されたのが「支笏洞爺ニセコルート」。そのシーニック草創期から支笏エリアの地域づくりの中心を担い、新しい観光の姿を追求してこられたのが佐々木義朗さんです。美しい初秋の支笏湖畔をお訪ねしました。

百余年の歴史を持つ道内有数の老舗旅館の経営に携わる一方、「シーニックバイウェイ」という新規的で広域の地域活動に積極的にかかわってこられました。

2003年に「千歳ーニセコルート」がモデルルートとなり、賛同する地域活動団体の募集が始まったときに、地元宿泊業者などで構成する国立公園支笏湖運営協議会として手を挙げました。シーニックの活動が単に道路を整備したり、管理するというのではなく、地域の魅力を引き出し、観光の活性化を目指しているところに共感したのです。

私が大学を卒業して日航系ホテルに就職したのは1985年。バブルの絶頂期でした。沖縄のリゾートホテルや千歳のシティホテルに勤務後、曾祖父・佐々木初太郎が開業し、父・金治郎が経営する丸駒温泉旅館の取締役副総支配人に着任したのは91年です。

当初はバブルの余波で経営は好調でしたが、2000年前後からお客様の数は伸び悩み、それまでのような商売の仕方でよいのか、模索する日々が続きました。支笏湖畔は、かつて年間300万人を迎えた国内有数の人気観光地ですが、2000年ごろには100万人を切るほどになっていたのです。

思えば、今から40～50年前の支笏湖畔はお客様獲得に不自由せず、言わば「確率で商売ができた」時代でした。来訪者が多いので、お腹が減れば食事、のどがかわけば飲み物、と必ず一定の割合のお客様に恵まれて商売に困らない。しかし、時代の流れで、このようなたまたま来てくれる観光客頼みの商法には限界がありました。「あの施設の食事を楽しみたい」、「あそこのコーヒーはおいしいからまた来たい」と、わざわざ訪ねてくれ、リピーターになってくれるお客様を増やす方向へと発想の転換が必要でした。シーニックの活動と出会ったのは、そのような支笏湖観光が過渡期を迎えたころでした。

2004年にNPO法人支笏湖まちづくり機構Neoステージが設立されるなど支笏湖畔の新しいまちづくりの取り組みが始まりました。これが現在の「持続可能な観光まちづくり」の源流になっているようですね。

支笏湖はこれからどういう観光地になればいいのか。従来の年輩者の集まりではなく、若い世代の者たちが集まって、

dec Interview

ささき　よしろう
1963年千歳市生まれ。85年国士舘大学政経学部卒業後、大手ホテルチェーンに就職。沖縄県国頭村のリゾートホテルや千歳市内のシティホテルに勤務。91年父・金治郎氏が経営する丸駒温泉旅館株式会社に戻り、取締役副総支配人に。2015年同社代表取締役社長。同年より（一社）国立公園支笏湖運営協議会会長、支笏湖温泉旅館組合長を務める。趣味は自然散策、人を感動させたり、喜ばせること。

地域に住む人たちの意見を幅広く集めていきました。シーニックバイウェイの活動参加をきっかけに始まった新たな取り組みでした。

観光関連にとどまらず学校の先生など公務員や主婦、高校生など地元住民のさまざまな声を踏まえて、新しい地域ビジョンをつくったのですが、そこで、まず打ち出したのは「地域に暮らす自分たちにとって楽しいまちにしよう」ということ。そうすれば、報道などを通じて外からも人が集まってくるだろうと。

そしてもう一つは「支笏湖に暮らす上で最も大切なのは静けさや景観。これを守ろう」ということでした。その具体的な取り組みの第一弾とも言えるのがジェットスキーの問題でした。当時は湖のあちこちでジェットスキーが乗り回され、騒音や油の流出が問題になっていました。しかし、ジェットスキーを規制する法律はなく、廃止するには動力船全体を廃止するしかありませんでした。しかし、それでは従来の遊覧船などの運航もできなくなります。

そこで地域の観光業者や千歳市の賛同を得て、動力船は基本的に廃止する一方で、遊覧船などの一部について特例的に運航を認めるという規制を環境省に要望しました。環境保全のために、地元が自ら役所に規制強化を求める、という異例の事態でしたが、2006年に要望は認められ、ジェットスキー等の動力船規制が実現しました。

もう一つの取り組みは支笏湖名物のチップ（ヒメマス）をめぐる環境保護です。以前は特にブランド化もされず、釣るのも食べるのも自由だったチップですが、自然環境を保全し、チップ釣りが適正に持続的に行えるようにしようと、2007年、道に申請して支笏湖漁業組合を設立しました。翌年、共同漁業権と遊漁規則が認可され、これにより入漁者から遊漁料をもらい、それを環境管理に充てるしくみができました。動力船の規制もあり、現在、チップ釣りは6月から3カ月間だけ許可されています。

「環境」重視を鮮明に打ち出したことで、支笏湖エリアはその後、自然体験プログラムやインバウンド対応において魅力ある観光地に進化していくのですね。

動力船規制後、支笏湖は環境省の水質測定検査の湖沼部門で2008年度から11年連続で水質日本一となりました。もちろん現在も全国トップクラスの水質を誇っています。この支笏湖の自然環境の良さに魅せられて、2010年ごろからカヌーなど水辺のアウトドアを中心に若い事業者たちが集まるようになりました。彼らは今では地域にしっかり根を下ろし、地域づくりに貢献してくれています。そのようなアウトドア事業者たちとの連携をもとに国立公園支笏湖運営協議会で作成したのが「支笏湖ルール」（支笏湖温泉街周辺水面利用に関するローカルルール）です。これにより静かな水辺体験を可能にするための利用者のマナーを呼びかけ、支笏湖エリアのブランド価値を高めることにつながったと思います。

一方、支笏湖温泉街には、2000年代に入って第一寶亭留さん、鶴雅グループさんなどリゾートホテルが開業し、私どものレイクサイドヴィラ翠明閣、丸駒温泉旅館を含めインバウンドのお客様の増加に対応できる観光エリアになりました。

2000年代初めの模索期を経て、地域で新たに描いたビジョンが、今ではかなり実現できたのではないかと思っています。

カヌーで水辺の散策

では、これからの支笏湖エリアにとって課題と思われることは何でしょうか。

地域のために、また丸駒温泉旅館のために何が必要なのかを考え続けていますが、単に自然体験のアクティビティを楽しんでもらう、自然を愛でてもらうというだけでなく、さらに踏み込んで「環境」についてお客様と一緒に考えていくことが大事だと思っています。「環境」をいろいろな商品に結びつけ、地域全体に意識を浸透させていきたいのです。

先日、子ども連れのグループを当館にお迎えしてファットバイクで水辺をご案内したのですが、終わって旅館で飲み物を飲んでいるときに、小学校3年生のお子さんに「紙製のストローを使っている。すごいね」と言われて驚きました。小3でもすでに環境保護に関する知識をしっかり持っていると。子どもたちは学校でSDGsなどについても学んでいて、環境を大事にする意識を植え付けられているのですね。そのような次の世代のことを考えると、環境に特化した取り組みがいかに大事かを感じます。企業体をつくることなども含めて地域全体に役立つ環境保全の活動ができればと考えています。

私は、丸駒温泉旅館二代目社長であった祖母（佐々木ヨシエ氏）に可愛がられて育ったのですが、SDGsの目標を見ると、子どものころ、おばあちゃんや母親から言われていた「もったいない」とか、循環を大事にする感覚とほとんど同じだな、と感じます。

遠からず、多くのホテルや旅館で従来のようなハブラシなどのアメニティのサービスをしなくなるでしょうが、お客様に共感、理解してもらえるようなかたちで、「環境」重視をさまざまなところで具体化していきたいと思っています。

環境省が2016年度から取り組む「国立公園満喫プロジェクト」では、先進事例11公園に支笏洞爺国立公園も選ばれ、国立公園支笏湖運営協議会を中心にした地域ぐるみの環境保全やインバウンド向けの発信が評価されています。

北湖畔に佇む丸駒温泉旅館

コロナ禍の影響でインバウンドのお客様が激減し、「国立公園満喫プロジェクト」の取り組み方は変わらざるを得なくなっています。ただ、私には海外のお客様が求めていた自然体験のニーズやサスティナブルな志向を、コロナ禍以降、日本人のお客様も同じように持つようになってきたという感触があります。だから、支笏湖の「持続可能な観光まちづくり」という路線はこのままでよいと思っているのですね。

ただ、支笏湖エリアにおける「満喫プロジェクト」の取り組みは、まだモニター的段階ですから、今後はより本格的な取り組みを実行し、失敗も経験しながら、本当の成功を導き出すことができればいい。私自身も今後どんどん携わっていきたいと思っています。

今、私が特に関心を持っているのは、旅行者と地元の人との交流を大事にするツーリズムです。実は、2007年ごろ、そうしたことを地元でも試みたことがありました。学校の先生や主婦などさまざまな地元の人が順にガイドを務めるバスツアーを実施したのですが、同じ場所を案内しても、ガイドによって全く話すことが違うという面白さがありました。このときは商品化に至りませんでしたが、アウトドア事業者さんたちとは競合しないかたちで地域を紹介できる利点もあり、今後、観光で訪れた人と地域との交流を仲立ちする仕事ができればと思っています。

支笏湖エリアは、すでに豊富なアクティビティを提供できる環境にありますが、目のつけどころを変えれば、さらにもっと多様で身近な感動体験が潜在しています。例えば、早朝に釣りに出て、一匹も釣れなくても、美しい朝日の絶景に魅了されることもある。そういうことも含めて湖畔で特別な体験を味わっていただきたいですね。

支笏湖畔はご自身にとって4代百余年というゆかり深いエリア。最後に地域に対する思いをお聞かせください。

1915（大正4）年、私のひいじいさん・初太郎が12キロ離れた対岸から船で、現地にたどりついたところから丸駒温泉の歴史が始まりました。ひいじいさんは「水があって、魚や動物もいて、温泉がある。このように美しく、平和な場所は見たことがない」と語ったといいます。今の私からすれば、それはまさにSDGsの世界のようでもあり、平和でサスティナブルな循環型の世界です。

私は小さいころ、湖で米をとぐ母親の姿を記憶していますし、魚のあらをとって湖に捨てると、そこにエビが寄ってきて、そのエビをとって食べるというような循環的な営みが身近にありました。そのような昔の暮らしのなかに、今後も継承していかなければならない貴重なものがあると思います。行動そのものではなくて、まさに精神を残していくことができたらと思うのです。

今の自分にとって、湖畔の身近な自然を普段とは違う角度から味わうことが一番、楽しいですね。滝を見たり、川のなかを歩いたりするのが好きで、最近になってチップ釣りも好きになりました。ちょっとした気配りで人を喜ばせたり、感動させることが大好きな性分ですから、この地の新たな魅力をもっともっと見出し、これまで出会うことのなかったお客様もお迎えしていきたいと願っています。

満喫プロジェクトでは、台湾WEBマガジン「初耳hatsumimi」と連携し情報発信を展開した他、https://lake-shikotsu.jp/ を開設しました。

WEBマガジン、SNSの情報発信

支笏湖マップの制作＆配布

支笏湖
ポータルサイト

話題提供　日本風景街道と国立公園の連携

前環境省環境再生・資源循環局長、NPO法人日本風景街道コミュニティ　アドバイザー　森山　誠二 氏

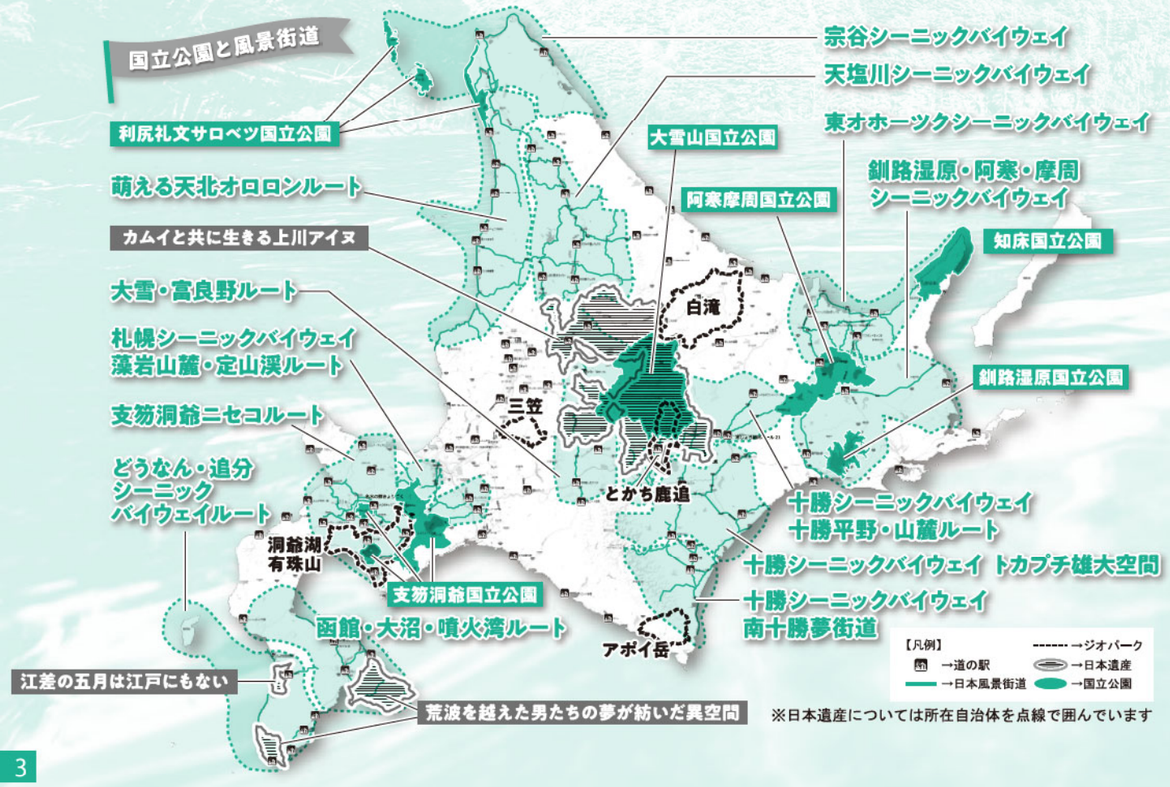
今年7月に環境省を退職しましたが、1986年の旧建設省入省以来、長く道路行政に携わり、「日本風景街道」(以下「風景街道」)については制度成立以前から数々の取り組みにかかわってきました。2005年の日本風景街道戦略会議でその枠組みは構築されましたが、その後10数年を経ても全国的な知名度が上がらないなど課題は多く、2018年に「日本風景街道有識者懇談会」で今後の発展に向けた具体的方策について提言がまとめられました。環境省に異動する前に私が携わった最後の仕事がこれです。

私論的に風景街道の課題を挙げれば、①地方の自主性に任せすぎで統一的なルールがない、②世界遺産登録のような活動の社会的目標がない、③観光施策など新しい行政政策との連携がない、ということです。

風景街道の今後を考えるとき、重要なポイントは「道の駅」や近年多様化する観光振興関連施策との連携です。特に「道の駅」は風景街道との親和性が高く、現在では民間ホテルが隣接開業するなど商業ベースに進展しており、全国団体の組織化によりスムーズな連携が期待されます。連携を検討すべき施策では「広域観光周遊ルート」、「日本版DMO登録制度」、「日本遺産」、「ジオパーク」、「世界で最も美しい村」などで、その動向を注視すべきでしょう。また、特に重要な制度には、道路利用団体が収益活動を含め参加できる「道路協力団体制度」があり、「エリアマネジメント」や「歩行者利便増進道路」とともに各施策の特徴を生かした連携が望まれます。

一方、「国立公園満喫プロジェクト」は、「2030年訪日外国人旅行者6千万人」という国の目標に向け、環境省が国立公園を観光資源として、その利用と保護の好循環を図ろうと2016年に始めた取り組みです。米国のナショナルパークに比べて日本の国立公園は職員がケタ違いに少ないという現実がありますが、コロナ禍以降もワーケーション推進や脱炭素化に向けた取り組みが意欲的に進められています。国立公園と日本風景街道、ジオパーク、日本遺産などのエリアをマッピングした全国地図を見ると、関東などに比べて北海道はエリアの重なりが多く、今後の連携が期待されます。

以上のようなことを踏まえて、風景街道は今後、どうすべきなのか。第一は2018年の有識者会議の提言内容の実行です。政策として取り組んでいる限りは進捗をフォローし、やれることはどんどん進めるべきでしょう。第二はアフターコロナの観光のあり方を見据え、風景街道がその受け皿になれるよう関連の施策や取り組みと支援し合うこと。第三は風景街道のモデルになるものをしっかりと磨き上げていくこと。そして第四は市町村や各種の協会団体との連携です。市町村により風景街道に対する認知度の差は大きく、道路行政関係者は知っていても観光部署には伝わっていないこともある。行政のなかでの認知度を高めなければなりません。後は、地域がどう頑張るか、そして私たちがそれをどうサポートするかだと思います。



※日本遺産については所在自治体を点線で囲んでいます

「日本風景街道と国立公園の連携」～NPO法人日本風景街道コミュニティ勉強会報告～

「日本風景街道」は、地域の多様な主体の協働により、道(みち)を舞台に、風景、文化などの地域資源を生かし磨いていく活動。国交省が2005年から取り組み、推進しています。シーニックバイウェイ北海道も参画するNPO法人日本風景街道コミュニティは、その活動団体の全国ネットワーク。今年8月、2021年度総会に併せ、標記テーマの勉強会がオンライン開催されました。メインのお話と意見交換を抄録的にご紹介します。

勉強会の様子

意見交換

森山氏のお話を踏まえ、石田東生代表理事の進行で全国の地域ブロック代表者らが、国立公園満喫プロジェクト(以下「満喫プロジェクト」)との連携を中心に、風景街道の今後について意見交換しました。主な発言は下記の通り。

他の制度と連携しないと、単独では「飛行」できない風景街道にとって国立公園との連携が上昇気流に乗るチャンスになるのでは。北米などの国立公園と異なり、日本は国立公園のなかに人の生活があり、そこに風景街道との親和性がある。風景街道は「面」である国立公園に「線」として誘導する役割があると感じます。ただ、風景街道の全142ルートに観光施策とうまく連携できる力があるのかどうか。また、ルートによって活動の成果が上がっているならば、風景街道の看板を無理に強調する必要はないと思います。

国立公園と風景街道との連携には期待しており、実際、支笏湖で取り組まれている満喫プロジェクトを支える団体の多くがシーニックバイウェイ北海道の団体です。風景街道の地域の活動の受け皿としての役割は大きく、さまざまなプロジェクトをつなぐ大きなプラットフォームになるのでは。活動展開にはコーディネート力が必要で、利他的精神の旺盛な人がいないと難しい。そうした人をどうネットワークしていくかが課題です。

米国では、公園局という国の機関がシーニックバイウェイのスポンサーになっており、国立公園のほとんどは国有地。活用のために積極的に観光やルート開発が行われています。日本の環境省が所管する国立公園・国定公園はほとんど民有地で、守るために厳しく規制されてきた。それを大転換したのが満喫プロジェクトです。米国の「グラント・ライザー」は政府などの補助金申請の支援について一定の費用で請け負う専門職で、全米で3千人ぐらいとか。今後、日本でも参考になるのでは。

大分県は国交省とネクスコ、環境省で「阿蘇くじゅう国立公園のインバウンド誘客に関する連携協定」を結んでいます。「道の駅ゆふいん」のデザイン化や九重高原でのサイクルツアーの振興など、満喫プロジェクトで環境省との連携に弾みがついています。

「ぐるり・富士山風景街道」では、「NPO法人富士山クラブ」が清掃活動やEバイク利用の脱炭素推進活動を行い、満喫プロジェクトが追い風になっているのではと思います。一方、富士山の登山道で非常に傷んでいるところがあり、復旧を求めても、なかなか進まない。環境省が目指す「保全しながら活用」は容易ではなさそうだと感じます。

米国を訪れたとき、地域の活動を支援する「グラント・ライザー」に話を聞きました。補助金申請のサポートで、申請が通れば成功報酬10%を得るとのこと。地元高知でもコンサル会社が類似のことをしていますが、仕事としての社会的認識が高まらないと成立しないでしょう。私たちのような専門性ある立場が退職後に率先してそうした支援ができればいい。長い目で見れば地域の雇用を広げることにつながるのでは。

寄稿 01

E-bike MTBを用いた ロングライドアクティビティ開発事業

有限会社阿寒観光ハイヤー 取締役社長
釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイ 阿寒湖エリア代表　松岡　篤寛 氏

はじめに

有限会社阿寒観光ハイヤーは阿寒摩周国立公園で観光タクシー事業をメインとしています。

2018年にタクシー会社としてははじめての、10人乗りジャンボタクシーを活用し、サイクルツアーにサイクリングガイドとサポートタクシーが帯同する「サイクルサポートタクシー」を開始しました。昨年度、環境省の「国立・国定公園への誘客の推進事業及び国立・国定公園、温泉地でのワーケーションの推進事業費補助金」でアフターコロナや「アドベンチャートラベル」(※1)に対応したツアー造成を目的に「E-bike MTBを用いたロングライドアクティビティー開発事業」として採択され、阿寒摩周国立公園に滞在するワーケーションなどの少人数グループや家族を対象にしたサイクルツアー造成を行い「アドベンチャートラベルタクシーツアー」が誕生しました。

サイクルサポートタクシー

事業の説明

ツアーは阿寒湖温泉と摩周湖、川湯温泉をつなぐ国道241号阿寒横断道路をこえ全長75kmの区間をE-bike(電動アシスト付き自転車)とサイクルトレーラーでつなぐ経験者コースです。阿寒湖温泉を出発し、双湖台、双岳台までの累計標高500mを登り、頂上からダウンヒル。のどかな農道風景を楽しみながら弟子屈町で昼食。摩周湖展望台から硫黄山へ下り、ゴールの川湯温泉を目指します。ツアーには初心者向けに同区間をサポートタクシーで移動しながら、景勝地周辺を36km走行する初心者コースもあります。

アドベンチャートラベルタクシーツアーの様子

乗客9人とE-bikeを車載するアドベンチャートラベルタクシー

このツアーの特徴はE-bikeとサイクルトレーラーを使う事により、今までは自転車経験者に限られていたロングライドツアーが、女性や高齢者の方や体力に不安のある方も参加ができる事にあります。体調や天候の変化があってもサポートタクシーで移動ができるので、安心したツアーの提供が可能です。また、旅の目的地までの移動がアクティビティーになり、地元の飲食や温泉入浴等を楽しみ、帰路はサポートタクシーで帰ることもできます。小学校高学年から60代の幅広い年齢層のモニターにご参加いただき、「普段車では通り過ぎていた風景も、自転車だから感じる風やにおいなどを五感で楽しむことができた」、「長距離や坂道を楽に登ることができ、風景を楽しみながらのサイクリングができた」、「サイクリングガイドとサポートタクシーが帯同するツアーで安心感があり、体力に自信がなかったが、いつでもサポートタクシーに乗れるという安心感でツアー全区間を走行することが出来た」等の感想をいただきました。

今後の展望

「自然とのふれあい」、「文化交流」、「アクティビティー」の要素を含む旅の形態をアドベンチャートラベルと呼び、国や道も積極的に推進しています。阿寒摩周国立公園でも、環境省の進める道東3空港をトレイルでつなぐ「ロングトレイル構想」が動きだし、摩周湖第一展望台から川湯温泉、屈斜路湖プリンスホテル(全長44km)を結ぶ「摩周屈斜路トレイル」の整備が進んでいます。国内や海外からのATトラベラーを受けいれる為の整備が進む中で当社も本業の観光タクシー業を活かしながら、サイクリングを核とした非動力のモビリティー事業にも力を入れていきたいと思います。

※1 アドベンチャートラベル：アクティビティ、自然、文化体験の3要素の内、2つ以上で構成される旅行

寄稿 02

国立公園を活用した アドベンチャートラベル事業

NPO法人南富良野まちづくり観光協会　事務局理事　小林　茂雄 氏

4年前から南富良野を中心とし国立公園を絡めたアドベンチャートラベル事業の立ち上げを行っています。アドベンチャートラベルはご存じの通り、「ネイチャー(自然)」、「カルチャー(文化)」、「アドベンチャー(冒険)」の3要素のうち2つ以上を組み合わせ、地域をじっくり旅する新しい旅のスタイルです。欧米豪で人気があり、ここ数年の成長が著しい旅行分野です。

海外のアドベンチャートラベラーから直接話を聞くと、北海道は非常に魅力的な場所とのことです。中でも北海道特異の魅力として、「ネイチャー」では毎年降る驚くほどの豪雪、北緯44度まで来る流氷、4種の大型鳥類、東アジアで唯一の涼しい夏、大雪山の山並など、「カルチャー」ではアイヌ文化、北国の暮らし、日本文化など、「アドベンチャー」ではバックカントリー、自然観察、トレッキング、サイクリングなどが挙げられました。また北海道には四季があり、箱庭のように自然や体験が凝縮されていて、そのうえリラックスできる温泉宿に泊まれるというのも魅力だそうです。

写真上・下：道東ロードバイクツアー

私はサイクリングを中心としたアドベンチャートラベルに注目しています。台湾では一般の、東南アジアでは富裕層でのサイクリングが普及しています。サイクリングは、体を動かして自身の健康を獲得する高尚な趣味と位置付けられています。欧米豪では二酸化炭素を排出せず、かつ自分自身の限界に挑戦するサイクリング旅行の需要が高まっています。

スイス アイガー北壁を望むグリンデルワルドでの電動アシストMTB

北海道のサイクリング環境は、適期が6月から9月と短いですが、東アジアで唯一の涼しい夏、良好な路面と道路環境、大自然と新鮮で美味しい食、安全安心な旅行環境と住民の温かさなどが魅力です。私自身もロードバイクで富良野美瑛や釧路根室の海岸線と台地を走りましたが、美しい自然景観と美味しい食事に改めて感動しました。

これからのトレンドは、電動アシスト自転車です。2017年10月、スイスモビリティ(スイス観光局が推進する人力移動旅行ルート)を知るため、スイスを訪れました。アイガー北壁を望むグリンデルワルドで体験したのが電動アシストMTBでした。レンタルショップでは、谷底の村から北壁正面の山の上まで行くのがお勧めと言いますが、とても私の脚力では登れるような坂ではありません。しかし借りた電動アシストMTBに乗るとすいすい坂を上ることが出来、下りは楽しいダウンヒル走行ができました。

弊観光協会では環境省の補助事業を活用して、国立公園を活用したアドベンチャートラベルの造成を行っています。昨年は電動アシストMTBで大雪山国立公園を一周する430kmの試行ツアー、今年は電動アシストクロスバイクとラフティングを楽しむ試行ツアーを行いました。北海道には、まだまだその魅力を伝えきれていない国立公園があると思います。今後、サイクリングを切り口にアドベンチャートラベルを造成し、国立公園の魅力を発信してゆきたいと思います。

大雪山国立公園での試行ツアー